大衆文学大系

林不忘
牧逸馬
谷譲次

大衆文学大系

18

林不忘
牧逸馬
谷譲次

監修＝大佛次郎　川口松太郎　木村毅

講談社

大衆文学大系18　林不忘　牧逸馬　谷譲次　集
昭和四十七年十月二十日　第一刷

著者　林不忘　牧逸馬　谷譲次
装幀者　田中一光
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)振替東京三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　大製株式会社
定価　二八〇〇円
©長谷川和子　一九七二年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

0393-136189-2253 (0)　(文2)

目次

林　不忘集
丹下左膳　五
牧　逸馬集
地上の星座　三五
谷　譲次集
テキサス無宿　六七
解説　九〇

年譜解題

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

林不忘集

丹下左膳

こけ猿の巻

伊賀の暴れん坊

一

さっきの雷鳴で、雨は、カラッと霽れた。

往来の水たまりに、星がうつっている。いつもなら、爪紅さした品川女郎衆の、素あしなまめかしいよい闇だけれど。

今宵は。

問屋場の油障子に、ぱっとあかるく灯が映えて、右往左往する人かげ。物々しい宿場役人の提灯が、ズラリとならび、

「宜しっ！　ただの場合ではない。いい加減に通してやる故、行けっ！」

「おいコラア！　その振分は検めんでもよい。さっさと失せろっ」

荷物あらための出役と、上り下りの旅人のむれが、黒い影を縺れさせて、わいわいいう騒ぎだ。

ひがしはこの品川の本宿と、西は、琵琶湖畔の草津と、東海道の両端で、のぼり下りの荷を目方にかけて、きびしく調べたものだが、今夜は、それどころではないらしい。

碌に見もせずに、どんどん通している。

大山もうでの講中が、逃げるようにとおりすぎて行ったあとは、まださほど夜ふけでもないのに、人通りはパッタリ途絶えて、何となく、つねとは違ったけしきだ。

それもその筈。

八ツ山下の本陣、鶴岡市郎右衛門方のおもてには、抱き榊の定紋うった高張提灯を立てつらね、玄関正面のところに槍をかけて、入口には番所が出来、その横手には、青竹の菱垣を結いめぐらして、まん中に、宿札が立っている。

逆目を避けた檜の一まい板に、筆ぶとの一行――「柳生源三郎様御宿」とある。

江戸から百十三里、伊賀国柳生の里の城主、柳生対馬守の弟で同姓源三郎。「伊賀の暴れン坊」で日本中にひびきわたった青年剣客が、供揃いいかめしく東海道を押してきて、あした江戸入りしようと、今夜この品川に泊っているのだから、警戒の宿場役人ども、事なかれ主義でびくびくしているのも、無理はない。

触るまいぞえ手を出しゃ痛い
伊賀の暴れン坊と栗のいが

唄にも聞えた柳生の御次男だ。さてこそ、何ごともなく夜が明けますようにと、品川ぜんたいがヒッソリしているわけ。たいへんなお客さまをおあずかりしたものだ。

その本陣の奥、燭台のひかりまばゆい一間の敷居に、いま、

びたり手をついているのは、道中宰領の柳生流師範代、安積玄心斎、

「若！　若！　一大事出来――」

と、白髪あたまを振って、しきりに室内へ言っている。

二

だが、なかなか声が届かない。

宿は、この怖いお客さまにおそれをなして、息を殺しているが、本陣の鶴岡、ことに、この奥の部屋部屋は、いやもう、割れっかえるような乱痴気さわぎなので。

なにしろ、名うての伊賀の国柳生道場の武骨ものが、同勢百五十三人、気のおけない若先生をとりまいて、泊りをかさねてここまで練ってきて、明日は、江戸へはいろうというのだから、今夜は安着の前祝い、若殿源三郎から酒肴が下りて、どうせ夜あかしとばかり、一同、呑めや唄えと無礼講の最中だ。

ことに、源三郎こんどの東くだりは、ただの旅ではない。はやり物の武者修行とも、もとより違う。

源三郎にとって、これは、一世一代の婿入り道中なのであった。

江戸は妻恋坂に、あの辺一たいの広大な地を領して、その豪富諸侯をしのぎ、また、剣をとっては当節府内にならぶものない十方不知火流の開祖、司馬老先生の道場が、この「伊賀のあばれん坊」の婿いりさきなのだ。

司馬先生には、萩乃という息女があって、それがかれを待っているはず――故郷の兄、柳生対馬守と、妻恋坂の老先生とのあいだには、剣がとり持つ縁で、ぜひ源三郎さまを萩乃に……という固い約束があるのである。

で、近く婚礼を――となって、伊賀の暴れん坊は、気が早い。さっそく気に入りの門弟をしたがえて、出かけてきたわけ。

さきにお目出度が待っているから、陽気な旅だ。その旅も、今夜でおしまいだというので、腕の立つ若い連中の大一座、ガヤガヤワイワイと、伊賀の山猿の吐く酒気で、室内は、むっと蒸れている。

供頭役安積玄心斎の大声も、一度や二度ではとおらない。

牡丹餅大の紋をつけたのが、

「こらっ、婢っ！　北廓はいずれであるか、これから参るぞ。案内をいたせっ。ははははは、愉快愉快」

とろんとした眼で見据えられて、酌に出ている女中は、逃げだしたい気もち。

面ずれ、大たぶさ、猪首に胸毛――細引のような白い羽織の紐が、詩を吟ずる。

玄心斎は、とうとう呶声をあげて、

「しずかにせいっ！　わしがこうして、お部屋のそとから声をかけておるのに、貴様たちは何だ。酒を飲むなら、崩れずに飲めっ！　――若！　や！　源三郎さまは、こちらにおいでではないのか」

師範代の玄心斎なので、一同は、ビクリッと鳴りをしずめて、キョロキョロあたりを見まわし、

「オヤ、若先生は、今までそこにおいでなされたが……はてな、何処へ行かれた」

三

さっき、到着のあいさつに、重だった門弟のひとりを、妻恋坂の司馬道場へ駈けぬけさせてやったのだが。

いまその者が、馳せ戻ってのはなしによると……。

会わぬ、という。

しかるべき重役が出て、鄭重な応対のあるべきところを、てんで取次ぎもせぬという。

けんもほろろに、追いかえされた——という復命。意外とも、言語道断とも、いいようがない。

約束が違う。聞いた玄心斎は、一徹ものだけに、火のように怒って、こうしてしきりに、主君源三郎のすがたを求めているのだが、肝腎の伊賀のあばれン坊、どこにもいない。

広いといっても知れた本陣の奥、弟子たちも、手分けして捜した。

と……玄心斎が、蔵の扉まえにつづくあんどん部屋の前を通りかかると、室内から、男とおんなの低い話し声がする。

水のような、何の情熱もない若い男の声——源三郎だ！

玄心斎の顔に、苦笑が上った。

「また、かようなところへ、小女郎をつれこまれて——困ったものだ」

とあたまの中で呟きながら、玄心斎、柿いろ羽織の袂をひるがえして、サッ！　障子をあけた。

「殿ッ！　左様な者と、トチ狂っておられる場合では御座らぬ。だいぶ話がちがいまするぞ」

夜なので、行燈はすっかり出はらって、がらんとした部屋……煽りをくらった手燭が一つ！　ユラユラと揺れ立って、伊賀の若様の蒼白い顔を、照らし出す。

兄対馬守をしのぐ柳生流のつかい手、柳生源三郎は、二十歳か、二十一か、スウッと切れ長な眼が、いつも微笑って、何ごとがあっても無表情な細ながい顔——難をいえば、顔がすこし長すぎるが、とにかく、おっそろしい美男だ。

今でいえば、まあ、モダンボーイ型というのだろう。剣とともにおんなを口説くことが上手で、その糸のような眼でじろっと見られると、たいがいの女がぶるると嬉しさが背走る。

そして、源三郎、片っぱしから女をこしらえては、欠伸をして、捨ててしまう。

今もそうで、旅のうらない師というこの若い女を引き入れているところへ、ちょっと一目おかなければならない玄心斎の白髪あたまが、ぬっと出たので、源三郎、中っ腹だ。

「み、見つかっては、し、仕方がない」

と言った。源三郎、吃りなのだ。そして、女を押し放そうとしたとき、

「門之丞めが戻りおって、申すには……」

言いかけた玄心斎、ぼうっと浮かんでいる女の顔へ、眼が行くなり、

「ヤヤッ！　此奴はっ——！」

呻いたのです。

四

藍の万筋結城に、黒の小やなぎの半えり、唐繻子と媚茶博多の鯨仕立ての帯を、ずっこけに結んで立て膝した裾のあたりにちらつくのは、対丈緋ぢりめんの長じゅばん……どこからともなく、この本陣の奥ふかく紛れこんでいたのだが、その自ら名乗るごとく、旅のおんな占い師にしては、すこぶる仇すぎる風俗なので。

「若は御存知あるまいが、この者は、妻恋坂司馬道場の奥方、お蓮さまの侍女でござる。拙者は、先般この御婚儀の件につき、先方へ談合に参った折、顔を見知って、おぼえがあるのだ」

お蓮さまというのは、司馬老先生の若い後妻である。玄心斎の声を、聞いているのか、いないのか——黒紋つきの着流しにふところ手をした源三郎、壁によりかかって、その剃刀のよう

に鋭い顔を、ニコニコさせて、黙っている。
「この妻恋坂のお女中が、何しにこうして姿をかえて、君の身辺に入りこんでおるのか？　それが、解せぬ。解せませぬっ！」
怒声をつのらせた玄心斎、
「女ッ！　返事をせぬかっ！」
「うらないをして貰っておったのだよ」
うるさそうな源三郎の口調、
「なあ女、余は、スス、水難の相があるとか申したな」
おんなは、ウフッ！　と笑って、答えない。
「爺さんの用というのは、何だ」
と源三郎の眼が、玄心斎へ向いた。
「司馬の道場では、挨拶にやった門之丞を、無礼にも追いかえしましたぞ。先には、あなた様を萩乃さまのお婿に……などという気は、今になって、すこしもないらしい。奇っ怪至極――」
「女ア、き、貴様は、どこの者だ」
女のかわりに、玄心斎が、
「故あってお蓮様の旨を体し、若の許へ密偵に忍び入ったものであろう。何うじゃっ！」
「お察しのとおり、ホホホホ」
すこしも悪びれずに、女が答えた。
「お蓮さま一党は、継っ子の萩乃さまに、お婿さんをとって、あれだけの家督をつがせるなんて、面白くないじゃアありませんか。それに、司馬の大先生は、いま大病なんですよ。きょう明日にも、お命があぶないんです。老先生がお故くなりになれば、あとはお蓮様の天下……ほほほ、それまでこの若様をお足どめして、旁こ様子を探るようにと、まア、あたしは、色じかけのお道具というところでしょうね」
「うぬっ、ここまで参ってかかる陰謀があろうとは――若っ、如何なさるるっ！」
と！　瞬間、ニヤニヤして聞いていた源三郎、胡座のまま、つと上半身を捻ったかと思うと、その手に、ぱあ！　青い光が走って、
「あウッ！」
いま歓を通じたばかりの女の首が、ドサリ、血を噴いて、畳を打った。播磨大掾水無し井戸の一刀は、もう腰へかえっている。
玄心斎、胆をつぶして、空に泳いだ。

耳こけ猿

一

首のない屍骸は、切り口のまっ赤な肉が縮れ、白い脂肪を見せて、ドクドク血を吹いている。二三度、四肢が痙攣した。
首は、元結が切れてサンバラ髪、眼と歯をガッ！　と剝いて、まるで置いたように、畳の縁に載っている。
血の沼に爪立ちして、源三郎、ふところ手だ。
「硯と料紙を持て」
と言った。
なにも斬らんでも……と玄心斎は、くちびるを紫にして、立ちすくんでいた。
門弟たちは、まだ源三郎をさがしているのだろう。シインとした本陣の奥に、廊下廊下を行きかう跫音ばかり――この行燈部屋の抜き討ちには、誰も気づかぬらしい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「萩乃さまの儀は、いかがなさるる御所存……」
玄心斎が、暗く訊いた。
「筆と紙を持ってこい」源三郎は欠伸をした。
「兄と司馬先生の約束で、萩乃は余の妻ときまったものだ。会ったことはないが、あれはおれの女だ」
「司馬老先生は、大病で、明日をも知れんと、いまこのおんなが申しましたな」
源三郎は、ムッツリ黙りこんでいる。仕方なしに、玄心斎が、そっと硯と紙を持ってくると、源三郎一筆に書き下して、
押しかけ女房というは、これあり候えども、押しかけ亭主も、また珍に候わずや。いずれ近日、ゆるゆる推参、道場と萩乃どのを申し受くべく候
そして、源三郎、つかつかと首のそばへ行って、蹲踞むが早いか、固く結んだ歯を割って、首にその書状をくわえさせた。
「これを、妻恋坂へ届けろ」
とまた欠伸をした。
首手紙……玄心斎が、緊張した顔でうなずいた途端、女の死体のたもとから、白い紙片の覗いているのに眼をとめた源三郎、引きだしてみると、書きつけのようなもので、「老先生が死ぬまで、せめて二三日、何とでもして伊賀の暴れん坊を江戸へ入れるな」という意味のことが書いてある。
筆者は、峰丹波……。
「その者は、司馬道場の代稽古、お蓮さまのお気に入りで、いわば妻恋坂の城代家老でござります」
「フフン、一味だな」と源三郎、紙の端へ眼をかえして、「この、宛名の与吉というのは、何ものか」
「つづみの与吉——それは、三島の宿で雇って、眼はしの利きますところから、お供に加えてここまで伴れ参った人足ですが、さては、司馬のまわし者……」
玄心斎がそこまで言ったとき、廊下に、多勢の跫音がド、ドッと崩れこんで来ました。

二

「御師範代は、こちらでござりますかっ？　タタ、大変なことが」
「開けてはならぬっ！　障子のそとで申せっ！　何だ」
玄心斎の大声に、一同はぺたぺたと一間のたたみ廊下に手を突く気はいがして、
「こけ猿が紛失いたしました」
室内の玄心斎が、障子を背に押えたまま、サッと顔いろをかえた。
「ナニ、こけ猿が？　して、お供の人数の中に、何人か見あたらぬ者はないかっ？」
「かの、つづみの与吉と申すものが、おりませぬ」
「チェッ！　してやられたか。遠くは行くまい。品川じゅう手分けして捜せっ！」
と玄心斎の下知に、バラバラっと散って行く伊賀の若ざむらいども。
「殿、お聞きのとおり、あのつづみの与吉めが、耳こけ猿を持ち出しましてござります。察するところ、彼奴、妻恋坂の峰丹波の命を受け、三島まで出張りおって、うまうまお行列に加わり……ウヌッ！」
「そうであろう」源三郎は、淡々として水のごとき顔いろ、「そこへ、今夜この女が、与吉と連絡をとりに、入りこんだものであろう。こけ猿は、何としても取り返せ」
「御意！」

玄心斎も、柄を押さえて、走り去った。

こけ猿というのは……。

相阿弥、芸阿弥の編した蔵帳、一名、名物帳の筆頭に載っている天下の名器で、朝鮮渡来の茶壺である。

上薬の焼きの模様、味などで、紐のように薬の流れているのは、小川。ボウッと浮かんでいれば、かすみ、あけぼの、などと、それぞれ茶人の好みで名があるのだが、この問題の茶壺は、耳がひとつ欠けているところから、こけ猿の名ある柳生家伝来の大名物。

このたび、源三郎婿入りの引出ものに、途中もずっとこの茶壺一つだけ駕籠に乗せて、大大名の格式でおおぜいで警護してきたのだ。

そのこけ猿の茶壺が、江戸を眼の前にしたこの品川の泊りで、司馬道場の隠密つづみの与吉に、見ごと盗みだされたのだった。

肩をいからした柳生の弟子ども、口々にわめきながら、水も洩らさじと品川の町ぜんたいを右往左往する。首を送りこむ役は、門之丞に下って、手紙をくわえた女の生首は、油紙にくるんで柳生の定紋うった面箱におさめられ、ただちに、夜道をかけて妻恋坂へ届けられた。挑戦の火ぶたは、切られたのです。

宿役人の杞憂は、現実となった。春は御殿山のさくら。秋は、あれ見やしゃんせ海晏寺のもみじ……江戸の咽喉しながわに、この真夜中、時ならぬ提灯の灯が点々と飛んで、さながら、夏は螢の名所といいたい景色——。

上様お風呂

一

槇の湯船の香が、プンとにおう。この風呂桶は、毎日あたらしいのと換えたもので……。

八畳の高麗縁につづいて、八畳のお板の間、壁いっぱいに平蒔絵をほどこした、お湯殿である。千代田のお城の奥ふかく、いま、八代吉宗公がお風呂を召していらっしゃる。

不思議なことには、将軍さまでも、お湯へおはいりのときは裸になったものです。

余談ですが、馬関の春帆楼かどこかで、伊藤博文公がお湯へはいった。そのとき、流しに出て三助君が、伊藤さんが手拭で、前をシッカとおさえているのを見て、あの伊藤さんてえ人は下賤の生れだといったという。高貴の生れの方は、肉体を恥じないものだそうです。

今この、征夷大将軍源氏の長者、淳和奨学両院別当、後に号して有徳院殿といった吉宗公も、こうしてはだかで、御入浴のところは、熊公八公とおなじ作りの人間だが、ただ、濡れ手拭を四つに畳んであたまへ載せて、羽目板を背負って、「今ごろは半七さん……」なんかと、女湯に聞かせようの一心で、近所迷惑な声を出したり——そんなことはなさらない。

御紋散らしの塗り桶を前に、流し場の金蒔絵の腰かけに、端然と控えておいでです。

五本骨の扇三百の侯伯をガッシと抑え、三葉葵の金紋六十余

州に輝いた、八代吉宗といえば徳川も盛りの絶頂。
深閑とした大奥。
松をわたってくる微風が、お湯どのの高窓から吹きこんで、暖かい霧のような湯気が、揺れる。
吉宗公は、しばらく口のなかで、なにか謡曲の一節をくちずさんでいたが、やがて、
「愚楽！　愚楽爺はおらぬか。流せ」
と仰有った。
お声に応じて、横手の、唐子が戯れている狩野派の図をえがいた塗り扉をあけて、ひょっくりあらわれた人物を見ると、……誰だって一寸びっくりするだろう。
これが、いま呼んだ愚楽老人なのか、成程、顔を見ると年寄りに相違ないが――身体は、こどもだ。まるで七つ八つの子供だ。
身長三尺……それでいて、白髪をチョコンと本多に結い、白い長い眉毛を垂らし、分別くさい皺ぶかい顔――うしろから見ると子供だが、前から見ると、そのこどものからだに、大きな老人の顔が載っかっていて、何とも異形な姿。
おまけに、この愚楽老人傴僂なんです。
そいつが、白羽二重のちゃんちゃんこを一着に及んで、床屋の下剃り奴の穿くような、高さ一尺もある一本歯の足駄をはいて、
「御めん――」
太いしゃ嗄れ声で言いながら、将軍さまのうしろにまわり、しごく尤もらしい顔つきで、ジャブジャブ背中を洗いはじめたから、こいつは奇観だ。
すると、八代様、思い出したように、
「のう、愚楽、来年の日光の御造営は、誰に当てたものであろうのう」
と訊いた。

二

二十年目、二十年目に、日光東照宮の大修繕をやったものだった。
何しろ、あの絢爛をきわめた美術建築が、雨ざらしになっているのだから、ちょうど二十年も経てば、保存の上からも修理の必要があったのだろうが、それよりも、元来、徳川家の威を示し、庶民を圧伏するのが目的で建てられた、あの壮麗眼を奪う大祖廟だから、この二十年目毎の修営も、奏の風に草も靡けとばかり、費用お構いなし、必要以上に金をかけて、大々的にやったもので。
もっとも、幕府が自分でやるんではない。
諸侯の一人をお作事奉行に命じて、造営費一さいを出させるんです。人の金だから、この二十年目のお修復には、じゃんじゃん費わせた。
これには又、徳川としては、ほかに意味があったので――。
天下を平定して、八世を経てはいるが、外様の大大名が辺国に蟠踞している。外様とのみいわず、諸侯はみな、その地方では絶大の権力を有し、人物才幹、一癖も二癖もあるのが、すくなくない。
謀叛のこころなどはないにしても、二代三代のうちに自然に金が溜って、それを軍資に廻すことが出来るとなれば、ナニ、徳川も昔はじぶんと同格……という考えを起して、ふと、反逆心が兆さぬでもない。
それを防ぐために、二十年目ごとに、富を擁しているらしい藩を順に指名して、この日光山大修復のことに当らせ、その

積った金を吐きださせようという魂胆であった。

いわば、出来ごころの防止策。

だから、この二十年目の東照宮修営を命ぜられると、どんな肥った藩でも、一度でげっそり痩せてしまう。

大名連中「日光お直し」というと天下の貧乏籤、引き当てねばよいが……と、ビクビクものであった。

出来得べけんば、他人さまへ——という肚を、みんなが持っている。で、二十年目が近づくと、各藩とも金を隠し、日本中の貧乏をひとりで背負ったような顔をして、わざと幕府へ借金を申し込むやら、急に、爪に火をともす倹約をはじめるやら……イヤ、その苦しいこと、財産隠蔽に大骨折りである。

ところが、江戸の政府も相当なもので、お庭番と称する将軍さまお直々の密偵が、絶えず諸国を廻っていて、ふだんの生活ぶりや、土民の風評を土台に、ちゃんと大名たちの財産しらべが出来ているのだ。誤魔化そうたって、駄目……。

このお庭番の総帥が、これなるお風呂番、愚楽老人なのでございます。

来年は、その二十年めに当る。

「今度は、誰に下命したものであろうの」

「左様ですな。伊賀の柳生対馬あたりに——」

と、愚楽老人、将軍さまのお肩へ、せっせと湯をかけながら、答えました。

三

八代さまの世に、日光修繕の模様はどうかというと、御番所日記、有徳御実記などによれば……

小さな修営は、享保十五年、この時の御修復検分としましては、お作事奉行小菅因幡守、お大工頭近藤左衛門、大棟梁平内七郎右衛門、寛保三年、同四年、奉行曽我日向守、お畳奉行別所播磨守、下って延享元年——と、なかなかやかましいものであります。

が、これらは、中途の小手入れ。

例の二十年目の大げさなやつは先代有章院、七代家継公のときから数えて二十年めにあたる享保十六年辛亥……この時の造営奉行、柳生対馬守とチャンと出ている。

つまり、この講談は、その前年からはじまっているのです。

来年の日光を誰に持って行こうかという、上様の御下問に対して伊賀の柳生へ——と愚楽が答えたから、吉宗公におかせられては、不思議そうなお顔。

「対馬は剣術つかいじゃアねえか。人斬りはうまかろうが、金なぞあるめえ」

とおっしゃった。吉宗は相手が愚楽老人だと、上機嫌に、こんな伝法な口をきいたもんです。

「ところが、大有り、おおあり、名古屋ですから、まあ、一度、申しつけてごらんなさい」

と老人、ちゃんちゃんこの袖をまくって——オット、ちゃんちゃンこは袖はない——将軍様の肩をトントン按摩しながら、

「先祖がしこたま溜めこんで——いかがです、しかし強すぎますか」

「いやよい心地じゃ。先祖と申せば、お前、あの柳生一刀流の……」

「へえ。うんとこさ金を作って、まさかの用に、どっかに隠してあるんですよ」

「そうか。そいつは危険じゃ。すっかり吐き出させねばならぬ。よいこと探ったの」

「地獄耳でさあ。じゃあ、伊賀に——」

「うむ。宜きに計らえ」

と仰言った。これで、大名たちが桑原桑原とハラハラしている来年の日光おなおしが、いよいよ柳生対馬守に落ちることはきまった。何でも、よきに計らえ……これが命令だ。都合のいい言葉があったもので。計らえられたほうこそ災難です。

吉宗、最高政策中の最高政策、もっとも機密を要する政談は、いつも必ず、この愚楽老人ひとりを相手に、こうしてお風呂場で相談して、決定したのだ。

裸の八代将軍をゴシゴシやりながら、何によらず、幕府最高の密議を練る愚楽老人――この、こどもみたいな不具のお風呂番のまえには、大老も、老中も、若年寄もあたまが上がらない。

この千代田湯の怪三助は、そもそも何もの？　……垢すり旗下の名で隠然権勢を張る、非常な学者で、また人格者でした。

金魚籤

一

慶長五年九月十五日、東西二十万の大軍、美濃国不破郡関ヶ原に対陣した。ここまでは、どの歴史の本にも、書いてある。

家康は、桃配というところに陣を敷いていたが、野天風呂を命じて、ふろ桶から首だけ浮かべて幕僚に策を授けた。これは、ほんとの秘史で、どの本にも書いてないけれど、この、大将の敵を前にした泰然たる入浴ぶりに、全軍の士気大いにあがり、それが引いては勝敗を決して、徳川の礎を据えたと言われている。

ところで、そのとき、バラバラと雨が落ちてきた。すると、幕下のひとりに、小気の利いた奴があって、その、湯にはいっている家康公に傘をさしかけながら、背中を流した。

その落ちついたありさまが、ひどく家康の気に入って、そいつを旗下にとり立てて、世々代々風呂番をお命じになった。

これが初代の愚楽で、それ以来、旗本八万騎の一人として相伝えて、将軍さまの垢をながしてきた。人呼んで垢すり旗下。

だから、愚楽老人、ただの風呂番ではない。真っぱだかの人間吉宗と、ふたりっきり、ほんとうに膝をつき合わせて、何でも談合できるのは、愚楽ひとりだった。

さて……。

今日は、いよいよ来年の日光修理の大役が、指名される日である。

早朝卯の上刻から、お呼び寄せの大太鼓が、金線を溶かしたお城の空気をふるわせて、トーツートウトーツトツとお櫓高く――。

参覲交替で江戸で在勤中の大名は、自身で、国詰め中のものは、代りに江戸家老が、おのおの格式を見せた供ぞろい美々しく、大手から下馬先と、続々と登城をする。

御本丸、柳の間は、たちまち、長袴に裃でいっぱい、白髪、若いの、肥ったの、痩せたの……。

内藤豊後守は、狆のような顔をキョトキョトさせ、小笠原左衛門佐は、腹でも痛いのか、渋い面だ。しきりに咳をする松平三河守、癖で矢たらに爪を噛んでいるのが、彦根侯、井伊掃部頭――子孫が桜田の雪に首を落そうなどとは、夢にも知らないで。

正面、御簾を垂らした吉宗公のお座席のまえに、三方に載せ

た白羽の矢が一本、飾ってある。
あの矢が誰に落ちるかと、一同、安きこころもない。
「イヤ何うも、百姓一統不景気で——」
「拙者の藩などは、草鞋に塩をつけて食っておるありさま、窮状、御同情にあずかりたい」
殿様連、ここを先途と貧乏くらべだ。

二

当てられてはたまらないから、いかに貧的な顔をしようかと、苦心惨憺。
「あいや、伊達侯……先刻よりお見受けするところ、御貴殿、首をまっすぐに立てたきり、曲がらぬようじゃが、如何召された。寝挫きでもされたか」
「ウーム、よくぞお聞き下された。実は、お恥かしき次第ながら、首が曲がらぬ、借金でナ」
中には、
「もうこれで一月、米の飯というものを拝んだことはござらぬ。米の形も忘れ申した。あれは、長いものでござったかな？それとも、丸いもの——」
「これこれ、米の噂をして下さるな。茶腹が鳴るワ」
「森越中殿。其許は御裕福でござろう、塩という財源を控えておらるるからナ」
「御冗談でしょう。こう不況では、シオがない」
赤穂の殿様、洒落をとばした。ドッと湧くわらい。これだけのユーモアでも、元禄の赤穂の殿様にあったら、泉岳寺は名所にならず、浪花節は種に困ったろう。
お廊下に当って、お茶坊主の声。
「南部美濃守様、お上がり——イッ！」
むし歯病みのような沈痛な顔で、美濃守がはいってくる。
四方八方から、声が飛んで、
「南部侯、どうも日光は貴殿らしいぞ、北国随一の大藩じゃからの——」
「よしてくれ」と南部さま、御機嫌がわるい、「城の屋根が洩って蓑を着て寝る始末じゃ、大藩だなどとは、人聞きがわるい」
今日は、凡ていうことが逆だ。
「何を言わるる。鉄瓶と馬でしこたま儲けておきながら……」
「儲けたとは何だ！　無礼であろうぞ！」
南部侯、向気だ。
金持ちといわれることは、きょうは禁物なのである。
途端に、この大広間の一方から、手に手に大きな菓子折りを捧げたお坊主が大勢、そろそろ出て来て、一つずつ、並いる一同の前へ置いた。
「愚楽さまから——」
という口上だ。一眼見ると、みんなサッと真っ赤になって、モジモジするばかり。ふだんから赤い京極飛驒守などは、むらさきに……。
おん砂糖菓子——とあって、皆みな内密に、愚楽老人へ賄賂に贈ったものだ。おもては菓子折りでも内容は小判がザクザク……愚楽の口ひとつで日光を免れようというので、こっそり届けたのが、こうしておおっぴらに、しかも、一座のまえで、みんなそのまま突っ返されたのだから、オヤオヤオヤの鉢あわせ。
あわてて背後に隠して、おやじめ皮肉なことをしやアがる……隣近所、気まずい眼顔をあわせていると、シーッ！　シッ！　と警蹕の声。
吉宗公、御着座だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com